

ヴァージニア・ウルフの小説における

‘globe’のイメージについて

向井 千代子

ヴァージニア・ウルフの小説の中で主要人物はしばしば啓示的瞬間、ある幻影(vision)を見る瞬間を体験する。そのような瞬間に付随して登場するイメージ群を大別すると、「光」(light)のイメージ群(‘light’, ‘lighthouse’, ‘flame’, ‘blaze’など)と、「球体」(globe)のイメージ群(‘globe’, ‘circle’など)の二つに分けられる。前者についてはかつて『V・ウルフの小説における「灯台」のイメージについて』と題する小論(注1)を書いているので、ここでは後者の問題に焦点をあててみたい。

‘globe’のイメージはV・ウルフにとってある完全体を表わしており、彼女はこれを人生における最も充実した瞬間を表わすものとして使用している。そしてそれは時には人生そのもののシンボルでもある。彼女の小説の中から、いくつか、‘globe’のイメージの登場する場面を見て行こう。まず *Night and Day* (1919) の終結部近くで、Ralphと婚約した Katherine が、女友達 Mary に彼らの婚約のことを知らせに行こうという Ralph の提案に反対する場面で、Katherine の内面は次のように描かれている。

She had no wish to see any one to-night; it seemed to her that the immense riddle was answered; the problem had been solved; she held in her hands for one brief moment the globe which we spend our lives in trying to shape, round, whole, and entire from the confusion of chaos. To see Mary was to risk the destruction of this globe. (p533) (注2)

彼女は今夜は誰にも会いたくなかった。大きな謎の答が得られたような気がしていた。問題は解決されたのだ。私たちが一生かかって混沌混沌の中から形作ろうとする、丸くて完全で完璧な球体を、ほんの暫しの間両手に抱えているのだ。メアリーに会ったら、この球体を壊してしまう恐れがある。

Katherine は Ralph と婚約し、人生に対する同じヴィジョン(注3)を共有した時、完全な一個の球体を所有していると感じた。しかしそれはほんの束の間のことで、それを知るが故に彼女はその貴重な一瞬を惜しむのである。

Mrs. Dalloway (1925) ではあからさまに ‘globe’ という言葉は使っておらず、‘life’ そのもののイメージが出てくるが、その描き方を見るとやはり ‘globe’ のイメージ群に入るものである。まず P48 の、Clarissa Dalloway が幼なじみの Peter (Clarissa のかつての恋人でもある) と会っていて昔を思い出す場面。

For she was a child throwing bread to the ducks, between her parents, and at the same time a grown woman coming to her parents who stood by the lake, holding her life in her arms which, as she neared them, grew larger and larger in her arms, until it became a whole life, a complete life, which she put down by them and said, “ This is what I have made of it! This! ” (And what had she made of it? What, indeed? sitting there sewing this morning with Peter.)

というのは、彼女は両親の間にはさまれて鴨にパンを投げている子供であると同時に、両腕に自分の人生を抱えて、湖の畔に立っている両親の所へ近付いて行く一人前の女でもあった。腕に抱えた人生は、両親に近付くにつれてだんだん大きくなり、ついにそれは欠ける所のない完全な人生になる。それを彼女は彼らのそばに置いて言う。「これが私がそれから作り上げたものよ!これが!」(でも私はそれから何を作り上げたのかしら? 一体、何を? 今朝針仕事をしながら、ここにピーターと坐っていて)

次に P203 で、パーティの席上で Septimus という青年の自殺のことを聞き、自室にひきこもってそのショックを鎮めようとする Clarissa の思考の中で。

Then (she had felt it only this morning) there was the terror; the overwhelming incapacity, one's parents giving it into one's hands, this life, to be lived to the end, to be walked with serenely; there was in the depth of her heart an awful fear.

そして（ほんの今朝も感じたことだけれど）恐怖がある。抑えがたい無力感がある。両親は私の手に渡してくれたわ、この人生というものを。最後まで生き抜くのを、それを持って静かに歩いて行くんですよ、と。でも私の心の奥底には途方もない恐怖感があるの。

どちらの場面でも「人生」は‘globe’とあからさまには表現されていないが、*Night and Day* からの先の引用と合わせ読むと、「球」のような「人生」を両親から手渡されて、その球を胸にかかえ持っておぼつかない足取りで歩む、一人の幼女の姿が浮んでくる。両親に見守られつつ彼女は歩む。最後の目的地まで歩ききらねばならない、その球を落さないように注意して。でも恐ろしい。自殺という行為によってその球体を割ってしまった Saptimus。Septimusの方が本当は正しいのではないか。そんな思いが Clarissa の胸をよぎる。

To the Lighthouse (1927) には ‘lighthouse’ のイメージが強烈で、‘globe’ のイメージは顕著でない。しかし Dorothy Brewster もその著書(注4)で指摘しているように、第三部の Lily Briscoe の回想の中に ‘globe’ という表現が出てくる。

It was some such feeling of completeness perhaps which, ten years ago, standing almost where she stood now, had made her say that she must be in love with the place. Love had a thousand shapes. There might be lovers whose gift it was to choose out the elements of things and place them together and so, giving them a wholeness not theirs in life, make of some scene, or meeting of people (all now gone and separate), one of those globed compacted things over which thought lingers, and love plays. (P295—P296)

十年前、今私の立っているのとほとんど同じ場所に立っていて、私はこの場所に恋しているにちがいないわ、と私に言わせたのは、多分何かこうした完成感だったのだわ。恋には無数の形がある。いろんな事物の要素を選りすぐって、一まとめにし、実人生においては持ちえないような完全さを与え、ある光景なり、人々（今はもういなくなり離れ離れになってしまったが）の集まりから、そこに思考がたゆたい愛が戯れるといった、あの球形の中味のぎっしり詰まった物の一つを作り出す才能をそなえた恋人もいるであろう。

ここで Lily が ‘globe’ のイメージを用いて語っているのは、芸術活動のこのようである。(注5) つまり自分の愛してやまない事物なり人々なりを原材料として、

一つの芸術作品——完成された物——に結晶させる、そうした芸術家の活動のことである。‘globe’とは、人生が芸術家に与える一つのイメージ、あるいは芸術家が人生について描こうとする究極的な「真実」(reality)のシンボルではないか。V・ウルフが*To the Lighthouse*を書き終えて*The Waves*に取りかかろうとしていた1928年11月28日の日記には次のような一節が見られる。

So the days pass and I ask myself sometimes whether one is not hypnotised, as a child by a silver globe, by life; and whether this is living. It's very quick, bright, exciting. But superficial perhaps. I should like to take the globe in my hands and feel it quietly, round, smooth, heavy, and so hold it, day after day. I will read Proust I think. I will go backwards and forwards. (P138, *A Writer's Diary*) (注6)

そうやって日々が過ぎて行く、そして時折私は子供が銀色の球に魅せられるように人生に魅了されているのではないか、これが生きることかしらと自問することがある。それはとても早く、輝やかしく、わくわくさせる。しかしおそらく皮相的であろう。私はその球を両手に取り、そのまん丸で滑らかで重味のある感触を静かに味わってみたい、そしてそれを抱きしめていたい、来る日も来る日も。プルースト(注7)を読もうと思う。行きつ戻りつしてみよう。

ここには人生という球体の二つの側面が語られている。一つは、めまぐるしい活動を続け、考える暇も我々に与えない流動する球体。もう一つは、過去、未来、現在をその中に含んで色とりどりに美しく輝く球体。前者は人生に流されつつ感じる人生への感覚であり、後者はある瞬間に立ち止まり、吟味し内観する人生への感覚である。プルーストの『失われた時を求めて』(*A la recherche du temps perdu*)の中には、日常のある瞬間に突然啓示のように過去のある瞬間が生き生きとよみがえり、過去のその時の感動が現在において再び体験されるという場面がよく出てくる。プルーストはこのように徹底的に「失われた時」への追求を文学の中で行った作家であったが、V・ウルフがその日記の中でプルーストを読もう、と書いた時、多分彼女は人生の第二の相についてじっくり考えてみたい、しっかり捕えてみたいと思ったのであろう。

次の*The Waves* (1931)には‘globe’のイメージや‘circle’のイメージがふんだんに出てくる。その際注意すべきはこれらのイメージは作品の啓示的瞬間に付随

して出てくるということで、*The Waves* における重要な瞬間は三つある。一つは六人の中心人物に愛される Percival の送別の宴（Percival はインドへ行くとしている）、一つは中年に達した六人が再会する、ハムプトン離宮でのディナー、最後に六人の内の一人、小説家である Bernard が自分をも含めた彼らの人生を「総括」（summing up）する終章である。それぞれの場面から引用をしてみよう。

1. Percival の送別の宴

“It is Percival,” said Louis, “sitting silent as he sat among the tickling grasses when the breeze parted the clouds and they formed again, who make us aware that these attempts to say, ‘I am this, I am that,’ which we make, coming together like separated parts of one body and soul, are false. Something has been left out from fear. Something has been altered, from vanity. We have tried to accentuate differences. From the desire to be separate we have laid stress upon our faults, and what is particular to us. But there is a chain whirling round, round, in a steel-blue circle beneath.” (P98)

「それはパーシヴァルだ」とルイスは言った、「微風が雲を分けて、やがてまた雲が一つになった時、むずがゆい草むらに坐っていたあの時と同じように、黙って坐っているながらパーシヴァルは僕たちに気付かせてくれる——まるで一つの肉体と魂であるものの分離した部分のように、寄り集って『僕はこれだ』とか『私はあれだ』とか言い張ろうとするのは間違っているということを。恐怖のために何かが取り残されていたのだ。虚栄心のために何かが変えられていたのだ。僕たちは相違点を強調しようとしていたのだ。別個のものでありたいとの気持ちから僕たちはそれぞれの欠点とか、それぞれに独自のものを強調してきたのだ。だがその下にははがね色の環となつてぐるぐる廻る、一つの鎖があるのだ」

“How strange,” said Susan, “the little heaps of sugar look by the side of our plates……Everything is now set; everything is fixed. Bernard is engaged. Something irrevocable has happened. A circle has been cast on the waters; a chain is imposed. We shall never flow freely again.” (P102)

「私たちの受け皿の横の小さな砂糖の山が」とスーザンが言った、「何て不思議に見えることでしょう……今や何もかもが固定されてしまった、凡てが定着してしま

ったわ。バーナードは婚約したわ。何か取り返しのつかないことが起ったのだけ。海面に環が投げかけられたのだけ、鎖が押しつけられたのだ。私たちは二度と再び自由に流れることはできないでしょう」

“ Now once more,” said Louis, “ as we are about to part, having paid our bill, the circle in our blood, broken so often, so sharply, for we are so different, closes in a ring. Something is made. Yes, as we rise and fidget, a little nervously, we pray, holding in our hands this common feeling, ‘ Do not move, do not let the swing door cut to pieces the thing that we have made, that globe itself here, among these lights, these peelings, this litter of bread crumbs and people passing. Do not move, do not go. Hold it for ever.” (P104)

「そろもう一度」とルイスは言った、「僕たちが勘定を払い終えて今にも別れようとしている今、僕たちの血液の中の環が、僕たちが余りに相違しているため、あんなにもしばしばあんなにも急激に破れてしまうものが、円く環を結ぶ。何物かが作られたのだ。そうだ、立ち上がって少し苛々と気をもみつつ、手の中にこの共通の感情を抱きながら僕らは祈る。『動かないで。回転ドアを動かして僕らが作ったものを粉々にしてしまわないで。ここにあの球体そのものがある。これらの灯火、これらの果物のむき皮、このパン屑の散乱と通り過ぎる人々の間に。動かないで。行かないで。それをいつまでも持っていようよ』と」

ここでは‘ globe ’や‘ circle ’は人々が分かち持つ共通の感情、共通の昂揚感のシンボルである。同じそうした「内的交流」(communion)の瞬間に対する反応にしても、貴重なものと感じ、少しでも長くその瞬間を引き伸ばしたいと思う Louis に対して、Susan は心のどこかしらで束縛のようなものを感じている。

2. ハムプトン離宮でのディナー

“ The flower,” said Bernard, “ the red carnation that stood in the vase on the table of restaurant when we dined together with Percival, is become a six-sided flower : made of six lives.”.....

“ Marraiage, death, travel, friendship,” said Bernard; “ town and country; children and all that ; a many-sided substance cut out of this dark; a many-faceted flower. Let us stop for a moment ; let us behold what we have made. Let

it blaze against the yew trees. One life.” (P162)

「花が」とバーナードが言った。「僕たちがパーシヴァルと一緒に食事をしたあのレストランのテーブルの上の花びんに生けてあった赤いカーネーションが六面の花になった、六つの生から作られたのだ」……

「結婚、死、旅、友情」とバーナードが言った。「町や田舎、子供やその他いろんなもの。この闇の中から切り出された多面体。多くの刻面をそなえた花。しばし立ち止って、僕たちが作り上げたものを眺めようじゃないか。いちいの木立を背景に、それを燃え立たせようじゃないか。一つの生を」

ここでは‘many-faceted flower’ (注8)が‘globe’と同じものを表現している。多面体の面の数が無数になれば球に近付くことを考えると、意識的な表現であろう、と思う。

3. Bernard の‘summing up’

“The crystal, the globe of life as one calls it, far from being hard and cold to the touch, has walls of thinnest air. If I press them all will burst.....Faces recur, faces and faces — they press their beauty to the walls of my bubble — Neville, Susan, Louis, Jinny, Rhoda and a thousand others. How impossible to order them rightly; to detach one separately, or to give the effect of the whole — again like music.” (P182)

「人生の水晶球とか、球体とかよくいわれるけれども、それは固く冷たい手触りのものであるどころか、この上もなく薄い空気の膜を持っているのだ。ちょっと押したら破裂してしまうだろう。……顔が浮ぶ。顔また顔が——それはその美を僕のシャボン玉の膜に押しつける——ネヴィル、スーザン、ルイス、ジニー、ロウダ、その他無数の顔。それらを順序正しく並べることの何と不可能なことか。一つ一つ個別に引き離すこともできなければ、これまた音楽のように、総体的な効果を与えることも不可能だ」

このように‘globe’のイメージが最も華やかに展開されるのが *The Waves* である。しかし次の *The Years* (1937) になると再び‘globe’のイメージははっきりとは現われなくなる。その理由としては二つ考えられる。一つは、*The Waves* において‘globe’のイメージを十分に使ったので、*The Years* でまたもや用いることに危

険性を感じたという技法的な理由。もう一つは、*The Years* においては *The Waves* におけるように内的世界に中心を置くのではなく、内と外とのバランス、社会の中に生きる人間群と社会の動きといったものに重点が置かれたため、個人の啓示といったものに余り多くの関心を払えなかったから、というものである。*The Years* の構成は、1880 年、1891 年、1907 年、1908 年……という風に、Pargitar 家の人々をめぐる様々のエピソードが年代記風に積み重ねられている。その中心人物の一人である Eleanor は家長制度の代表的な父の犠牲者ともいえる。Present Days と題される終章は最も長いもので(注9)、前の他の章全体と対比的に置かれている所は、*The Waves* の終章と他の章との関係に構成的に似ている。この章（これは第一次大戦後のある年——おそらく 1930 年代）で、Eleanor はパーティの席上で一つの啓示的瞬間を持つ。しかしその啓示は、はっきりと解明されないままに終る。

There must be another life, she thought, sinking back into her chair, exasperated. Not in dreams; but here and now, in this room, with living people. She felt as if she were standing on the edge of a precipice with her hair blown back; she was about to grasp something that just evaded her. There must be another life, here and now, she repeated. This is too short, too broken. We know nothing, even about ourselves. We're only just beginning, she thought, to understand, here and there. She hollowed her hands in her lap, just as Rose had hollowed hers round her ears. She held her hands hollowed; she felt that she wanted to enclose the present moment; to make it stay; to fill it fuller and fuller, with the past, the present and the future, until it shone, whole, bright, deep with understanding. (P461)

もう一つの人生があるにちがいないわ、と彼女は感情をたかぶらせて椅子に身を沈めながら考えた。夢の中にではなくて、ここに今、この部屋の中に、生きている人たちと一緒に。まるで髪を後ろへ吹きなびかせて、崖縁に立っているかのような気がした。彼女をすり抜けようとする何かを今にも把みかけていた。もう一つの人生があるにちがいない、ここに今、と繰り返してみた。これでは余りにも短かすぎる、余りにも切れ切れすぎる。私たちは何も知っちゃいないんだわ、自分自身のことについてすら。私たちはほんの今しがた理解しはじめたにすぎないんだわ、ここ、かしこで、と彼女は思った。彼女は膝の上に両手で窪を作った、さっきローズが耳

のまわりに作ったのと同じような手の窪を、彼女は両手を窪ませたままでいた、そしてそこに現在の瞬間を取りこめたい、そこに滞らせたい、それを過去や現在や未来でもっともっと一杯に満たしたい、そしてついにはそれが深い理解によって全一の姿できらきらと輝きだすほどに、と彼女は思った。

両手で作った「窪」とは‘globe’を受けとめるためのものではないか、と想像してしまうもの、あながち全くの誤解とは言えまい。はっきり‘globe’とは言われないが、最後の数行からは今にも光を放つ、丸い球体が姿を現わしそうな気配が感じられる。しかしこの啓示も不満足なままに終る。何故なら Eleanor が彼女の思いを分け合おうと話しかけた Edward は彼女の言葉に耳をかさず、他の人と話していたからである。彼女は両手を開いてしまう。彼女は自分の啓示的瞬間を他と分ち合うことも共有することもできなかった。彼女は自分の前に「果てしない夜」(the endless night) が広がっているように感じる。しかしながら一方で何となく明るい光茫の余韻があたりに漂っている。このように *The Years* においては不満足な形でしか啓示的瞬間は描かれていないが、まるっきりの絶望の世界というわけではないのである。

Between the Acts (1941, 遺作) になると‘globe’のイメージは現われない。この作品の背景は第二次世界大戦前夜(1939年)の、イギリスのある田舎の邸で行われる野外劇(pageant)である。村人たちの演じる‘pageant’はイギリスの歴史を扱っている。‘pageant’の模様と観客たちの様子、‘pageant’の演出家 Miss La Trobe の心理等が描かれる。そこで読者に、そして観客たちに、最も強烈な(ぎくっとするような)印象を与えるのは、‘pageant’も大詰めになって‘present day’の表現として村人たちが手に手に何か鏡の役割をするものを持って出てくる場面である。それは現代の文明が「断片」(fragment)と化し、現代人もまた「断片」としての自己しか所有していないことへの痛烈な批判でもあろう。

戦争におびやかされる現在の状況下では‘globe’のイメージは構成されない。その代りに粉々になった‘globe’を思わせるガラスの破片が現われる、ということは意味深長である。それはV・ウルフ自身の精神の崩壊を意味しているとも考えられるし、ナチス・ドイツの台頭、近づく戦争への予感、夫バーナード・ウルフ(Bernard Woolf)がユダヤ系イギリス人であったことなどによる現実の危機感のためであったとも考えられる。勿論、鏡の破片を‘globe’の破片と解釈することには異論も多々あると思われるが、この不安に満ちた文明批評の書——そこにT・S・エリオッ

ト(T. S. Eliot)の『荒地』(The Waste Land)^(注10)の影響を見る評者もいるが——の出版を待たずに突然(1941年3月28日)ウーズ河に投身自殺をしてしまった事実を考える時、彼女が‘globe’にこめた意味をもっと深く追求し、もっと確乎たるものを把みたいという思いで一杯になる。

以上のように、この論文では一貫して‘globe’のイメージを見てきた。しかしながら、同じような啓示的瞬間に付随して登場する‘light’のイメージと‘globe’のイメージとは決して別物ではないであろう。その両者のイメージは彼女にとって、人生の「真実」(reality)の二局面であったにちがいない。その点についての追求は他日稿を改めて試みてみたい。

—Notes—

1. 早稲田大学英文学会『英文学』第43号所載。
2. 以下すべて V. Woolf の著書のページ数は Hogarth Press 版のものによる。
3. これが ‘flame’ のヴィジョンである。P522～P523 参照。
4. Dorothy Brewster: VIRGINIA WOOLF, P80 参照。
5. 画家 Lily は Part I で(十年前)描きかけていた絵を Part III で完成させる。
6. A WRITER'S DIARY, 1953 出版。
7. Marcel Proust (1871–1922) フランスの文学者。代表作は “A la recherche du temps perdu” (1913–’27)。
8. P90～P91 の Bernard の言葉にも ‘seven-sided flower’ が出てくる。
9. P329～P469 までが ‘Present Day’ の章である。
10. 1922 出版。